勉強会の補足資料

① みりん関係:　主要二社の生産高の比較について
（岡理事の『相模屋堀切紋次郎家文書の概要』に記載の石高推移の説明を受けて）

田村理事長の補足説明は下記のとおり。

（石高の）数字はみりんだけでなく、酒も含んだ合計の数字。石は米の数字。
幕末にかけて小規模の酒造家は株（鑑札）を金持ちに売却。相模屋の下で子会社のようにしていたところが 5 件ほどあった。それらの合計の石高の数字。小規模のところはみりんは作っていなかった。
天保 4 年の資料には、紋次郎 900 石、三左衛門 930 石とあり、みりんは、そのうち紋次郎が 65％（＝569 石）、三左衛門が約 40％（＝356 石）となっており、紋次郎のほうがみりん中心だった（多かった）ことがわかる。
幕末の頃の数字は先の資料のとおりで、酒も含んだ数字だが、ここでも紋次郎のほうがみりんの生産は多かったと推測される。
さらに明治になると、三左衛門のほうは、明治 22 年～27 年の 6 年間で、みりんの出荷量が年平均 2538 駄（駄:馬 1 頭で運搬する量）。紋次郎は、明治 32 年～38 年の 4 年間で年平均 1513 駄となっている。時期が異なるが単純に比較すれば三左衛門のほうが出荷量が多かったことになる。
年代によって違うし、一概に多い、少ないは言えない。また正確な資料もない。質問があった際は、「だいたい同じくらい」と答えるのが良い。若干紋次郎のほうが多かった、三左衛門のほうは酒が多かったとは言えるだろう。明治に入るとまた違ってくるが。
白みりんと赤みりんで見ると、三左衛門は明治 22 年～27 年でみると白みりんが 26%、赤みりんその他が 74%となっており赤のほうが中心だった。紋次郎のほうは、明治 32 年～白が 78%、赤 22%と白みりんが中心だった。みりんの種類（銘柄）は、赤白など 10 種類ほどあった。高いものも安いものもあり、それぞれに製法なども違っていたようだ。
その他、売上や利益などの観点からみてどうか、などとなると、単純には大小の比較はできなくなる。
結論としては「ほぼ同じ規模だったのではないか」となる。